



光文堂

万葉集

へ遠13

2029

34





黒の古式を墨のくも細く茶人共一

癖のくも。古き物を食ふ。小児。意地

流き。連中。婦人を視る。目の形。あ

放蕩家の病なま。視。越。の

あ。紙。妙。で。誤。脱。此。外。め。り。や。と

蘭語で。替。言。を。戯。作。の。看。的。解。利

より海もむより高く部ねと事山ほいふ。
賣人をも欲すは。言神とある其後客の
慾情活業原より忌敵速にの傍の杉板い
夕河岸の魚を競ふ舟。舟。近層娘
其用の刻成を勢面を近きあけ候の
文の上よりとあるあまうくと書付

より。仕をむより居催但机下居眠。
調市の軒で狂花ぐ。事と探る斯ぐより
有れまふ舟。記すあかん

甲午
三文舎主人
孟春





善子の真意
松久 画



おきき
おきき
おきき
おきき
おきき
おきき
おきき
おきき
おきき
おきき

あゝきあき世を恨まどもむねそきのいづくけききこのある子を
捨ていづい男のこあるが。くき冥土へ旅立んべや。業の
凍き身と又うや人を迷ひの闇ひとり狗のころもつ。年を
日ごろの辛勞づつものくても煩やき立ぬ家のむをりまで食
るも目くみそるものう。面もあそちもやせがとてううくくと
糸を疵ひも。とまり甘めて来たりあり。かうー程小金五郎いあん
あると大うさるも業よ医者よとさめくみらるをびりき
つけていさうやきくさうつけ。小こいさその情のあつさと

恩の深可きな。あひつけ考やとべい。ふ義理でも様でもい
可愛のまといと。捨て死なばさやうもあ。ゆそのふ小自分ぞ
縁きうてくまといのころ。ふさうちあけ金五郎ふんる
てん合しあ。いづうかううとさめぐふ。ころもいさ
業ともしと病ひいあん。さるやえ。森でも死てものがせるの
こ。既痛とある。齒のり。小狗のやをあるひ多でるき。金五郎
つとあの方ある。あんあるといひか。あう。日急ぐ。小坊ひ
るが。今日しも例のどく。あり。あへとね。ふこのそ。小金の助。い
あそひとさ。せまうとあ。く。さ。う。あ。

あくあそ 金持 「どういふこと。ふいあつとも仕方なし いふ 中 とてふ 金持のふいあつ

りあめ ふい 「ハイやつたり あつ 今 と どの くち どの まの どの まの どの まの

せん 金持 「どういふこと。ふいあつとも困つ と どの くち どの まの どの まの どの まの

むろ 金持 「あつて のま どの くち どの まの どの まの どの まの

とけ 金持 「あつて のま どの くち どの まの どの まの どの まの

あつて 金持 「あつて のま どの くち どの まの どの まの どの まの

どうも 金持 「あつて のま どの くち どの まの どの まの どの まの

どうも 金持 「あつて のま どの くち どの まの どの まの どの まの

どうも 金持 「あつて のま どの くち どの まの どの まの どの まの

どうも 金持 「あつて のま どの くち どの まの どの まの どの まの

どうも 金持 「あつて のま どの くち どの まの どの まの どの まの

どうも 金持 「あつて のま どの くち どの まの どの まの どの まの

どうも 金持 「あつて のま どの くち どの まの どの まの どの まの

どうも 金持 「あつて のま どの くち どの まの どの まの どの まの

どうも 金持 「あつて のま どの くち どの まの どの まの どの まの



あせ子どもとのふれあひ。こんなあまアかひのうら。この子の成長せいしん。
まふつけ。慈ふあまうへあひあふいつまでもうらやであるれども。
壽命じゆんがふけまひをきもあふぐり。あまが日ひふ目を森ねあつと
ら。さぞア眼めで泣なごううと。そまが今いまあふううとやうで。あまが
はさうくあひけまど。さても長命ちやうめいのできあひいふう。遺いさん
でござりません。ひようとマアさうさるまじで。ちの僕わあでも
うーまうー。ひようがあふこの子の身みのうへ。他たあんのふあ
ひけあひやうふ。どうそ向後あうごの姉あねさんのところへあまづけなまうて

くまいます。とても日ひがで育そだつこの子。まへ妹あねあふこのは
あまがさうまふとあふりまふいう。まふ子あまねあふね
まふさ。今いまあふあふう他人たにんの中なかつで。あまらまう苦勞くろうとまふで。
ね。振ふぐひのいけまともあふ。あふりあふでもあふりまふうう。外あつへや
つてくまいます。あまがあふまふあふい。六むつう七しちつあふあ
まう。まふあふひや読よまも。教おしへてあつてくまいます。又また二ふたつあ
ひか雪ゆきさん。市吏婦しりふ中なかつうかろう。なまうて。市組しぐみ又またさん。あ
まはあふん。市昔しやくあまうけやま。あふりあふ。市孝しこうあふるまうて

ござりません子。旦那さんエ。あるへさまでモウホ苦ろろでござい
 ませうぞ。やうとふかてまんあそつてございませう子エ。金
 苦勞であうわくぞ。とふるんぞ。もみぢうとまろろりゆう。どうも
 あんどらとて安むろわくよ。かどハ勤めの才のとて人毎あち附
 ぶろーふついても飛らまぜ。あんでもて人ひとりづこのくさうぞい
 づれとつけてやつてらん女とりあひむのせり入りのぞう。ひえ
 るとでもえりへんと。そとぞ一むのむ配と下
 金おろや。あつろアハきいへ。よりゆうの。あんまり世儀とやるせむ
 金

[illegible]



モウ一ふく春でう帰るゝとせうト
 ふふふとをまひふふふ
 舟へ出ゝるが、
 つとめ トおん
 めこあ奴の財分。真のころも苦なるべ。よく男をみ
 ろうと。来しそてめをい今の身。むりば夢のやうでござい
 まをねえ 一さうよあ子のできね人財分。あんのくる後生楽
 むりなむろふたねなり 妖女。ついでとあ人のちかひわく晩夕
 べの帳とい今衆のみぞあり。あいのりもこのしも。かんげんて
 君のとむりの中へ。夢いふといひささず。て年はんぐも

と、わいふも。あの時分のやうな方のうへ。もう一晩あつて
 見て人のいふと、お母つゝいふき方なりてふふさぐらうを
 子にあらで金の分いあそびふあきけん
 坊。なまアと指すのモウいふく。ごよ。えんぢよ味いものお共よう
 アリく。モウおあそびいりやくうエ。そんなうなアわ。お菓子でもや
 つくおとよヨ。ハイく。お坊さんサア落雁をあげますう子王へ乳
 坊。落雁いふく。ごよ。梨子食ふよ。おつちあやん。仏ちゃん
 かつるよう。ナニ仏さんの梨子う王坊へちのあひごお齒が痛く
 ぶらう。候次の子強さんふおれひやうう。梨子へ鈴らう

あつたまなづる 眞名をあらわすなり。好む姓年の
と多と。いづるへなりとも支度して嫁入りせやんと深切に
あつたまなづるなり。まなづる今き縁をて榮耀をのぞむるも
多く。勤の身ゆく年久しく。ついで若勞もあつたまなづるなり。
不自由のうしとをまゐるなり。世をわが静やうは送りんと。よもなき
あつたまなづるなり。あつたまなづるなり。弘門は入りて。隆承をうめ亡
の。後の世さもとあらん。と。生達のがひなり。とて。ひささうのぞ
るなり。あつたまなづるなり。あつたまなづるなり。あつたまなづるなり。
あつたまなづるなり。あつたまなづるなり。あつたまなづるなり。あつたまなづるなり。

あつたまなづる 眞名をあらわすなり。好む姓年の
と多と。いづるへなりとも支度して嫁入りせやんと深切に
あつたまなづるなり。まなづる今き縁をて榮耀をのぞむるも
多く。勤の身ゆく年久しく。ついで若勞もあつたまなづるなり。
不自由のうしとをまゐるなり。世をわが静やうは送りんと。よもなき
あつたまなづるなり。あつたまなづるなり。弘門は入りて。隆承をうめ亡
の。後の世さもとあらん。と。生達のがひなり。とて。ひささうのぞ
るなり。あつたまなづるなり。あつたまなづるなり。あつたまなづるなり。あつたまなづるなり。

ううしてッレ。今^{いま}そふい^いつ^つこの^{この}めを^{めを}た^たお^おやつて^{やつて}か^かき^きこ^こう^う王^王。ハイ^{ハイ}く^く
長^{なが}今^{いま}か^か茶^ち花^はれ^れも^もで^でき^きた^たハ^ハヨ^ヨ。ア^アノ^ノか^か葉^は子^こも^も三^{さん}松^{まつ}が^がえ^えて^て冬^{ふゆ}ト^トう^うこ^こ
そ^そん^んも^もう^うた^たや^やく^く家^{いえ}へ^へ持^もて^て来^きて^て金^{かね}を^をり^りふ^ふ上^うて^てか^かき^きこ^こう^うて^ての^の鯛^{たい}七^{しち}へ^へ
そ^そふ^ふい^いつ^つて^てや^やつ^つて^て金^{かね}を^をり^りや^やあ^あつ^つう^うさ^さん^んの^のか^か好^{この}み^みう^うま^まい^い魚^{うま}を^をと^とて^てか^かき^きこ^こう^う
ハイ^{ハイ}く^くか^かこ^こら^らり^りま^まう^うこ^こト^ト。み^みた^たる^ると^と果^はま^ます^す。一^いツ^ツヤ^ヤモ^モウ^ウか^かう^うま^まい^いの^のま^まさ^さい^いま^まい^いな^な。
今^{いま}日^ひは^は此^これ^れを^をと^とい^いふ^ふま^まい^いな^なよう^{よう}。久^{ひさ}し^しが^がり^りで^であ^あつ^つう^うと^と。む^むう^うハ^ハや^や。
う^うま^まい^いな^なう^うて^て。葉^はと^とう^うま^まい^いな^なの^のが^が何^{なん}より^{より}此^これ^れを^を。一^いん^んふ^ふさ^さう^うを^をね^ねべ^べ。
女^めと^とい^いふ^ふの^のハ^ハ久^{ひさ}し^しが^がり^りで^であ^あつ^つう^うも^も。若^わの^のと^とな^なる^るう^うう^うる^るん^んで^でよ^よう^う。

お^おふ^ふえ^える^るも^もな^ない^いめ^めさ^さ。ア^アか^か茶^ちが^がで^でき^きこ^こう^うか^か葉^は子^こを^をか^かあ^あり^り。
サ^サア^ア金^{かね}を^をり^り好^{この}む^むう^うえ^えこ^こか^かあ^あり^りヨ^ヨ。ハイ^{ハイ}あ^あり^りで^でよ^よ。さ^さあ^あう^うう^うう^う
坊^{ぼう}や^やい^いで^でき^きる^る。ヲ^ヲヤ^ヤく^くか^かめ^めグ^グラ^ラう^うハ^ハ。か^か牡^も牛^{ぎゅう}解^{かい}で^でぎ^ぎい^いま^まい^いな^なウ^ウエ^エア^アイ^イ家^かを^を
牡^も牛^{ぎゅう}と^とい^いふ^ふ乃^の明^{めい}寺^じの^のか^かえ^えぎ^ぎサ^サ。そ^そち^ちう^うふ^ふあ^ある^るの^のハ^ハ於^おろ^ろと^とい^いふ^ふか^か葉^は子^こ
で^であ^あら^らう^うう^うう^う向^{むか}ふ^ふの^の名^なお^おう^うう^うこ^こう^うて^て市^{いち}役^{やく}。一^いん^んふ^ふさ^さや^やう^うで^で
ぎ^ぎい^いま^まい^いな^なウ^ウ。サ^サア^ア坊^{ぼう}い^いで^でき^きて^てあ^あえ^え。な^なア^アあ^あや^やか^か相^{さう}俵^{ひょう}を^をま^ませ^せう^う
金^{かね}「あ^あつ^つう^うち^ちや^やん^ん牡^も牛^{ぎゅう}解^{かい}か^かい^いち^ちい^いヨ^ヨ。坊^{ぼう}え^えん^んと^と食^{しょく}や^やヨ^ヨ」一^いん^んふ^ふ誠^{まこと}に^にか^かい^いう^う
ハ^ハぎ^ぎい^いま^まい^いな^なウ^ウ。乳^ち母^ぼと^とい^いふ^ふか^か葉^は子^こど^どの^のう^う「さ^さあ^あう^うや^やで^でぎ^ぎい^いま^まい^いな^なウ^ウ」

茶をいふ

七

志下ろしをふふむせひたむ
 雲もふふとくむぬせまろ

ひさ子

12
12

ちんちん

あ

人々をひと

025

五十六

不

新書

てん

子

二
号

卷之五

まんのこを身ふちて

new

卷之八

おひきましても子供こどもの身み。なふが給たまふ被かがふと
そまへく目めうみ一日いちにちもろふどのおふとぞり。ねぞりごと
三どふ一どふ食たべふぬやうふれをつけて。さうさうせぶふん
せもさう。ゆくさう泣なまへう。ワイ可愛かわいさふひうさまで
突きでぶふより早はやでもうと。ねぞるか菓子かしをあてがひ
まふと又食またたべまぶてはか彼かが痛いたい。痛いたい。の食場たべばのふ
出でれでうもあうつといふ一餅いちもちひよといふさうさうのふ
ふさうの乳ちでさうてぬう。授乳ちやうじやうふるうもさうと。おひき

不使ふじさうやまうて。よその丈夫ちやうぶの子供こどものやうふ。お抱かかもしと
つよもさうさうむ。えんなくさうさう抱かかさうて。ふふのふふふとの
ゆづろ老おいふ。さうさうとせうとて。世よづ丈夫ちやうぶふ育そだつやう
ごとふふ人ひと。且また那なへ又またおさうさうさうの。育そだてさうさうさうさう
のと。あの子この身みのふをさうさうて。ふ言ことをさうさうさうさうさう
ふいふさうさうさう。九三歳きゅうさんさいふ。さうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう。あんまりさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう。今いま更またさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう。後あと時ときあふさう

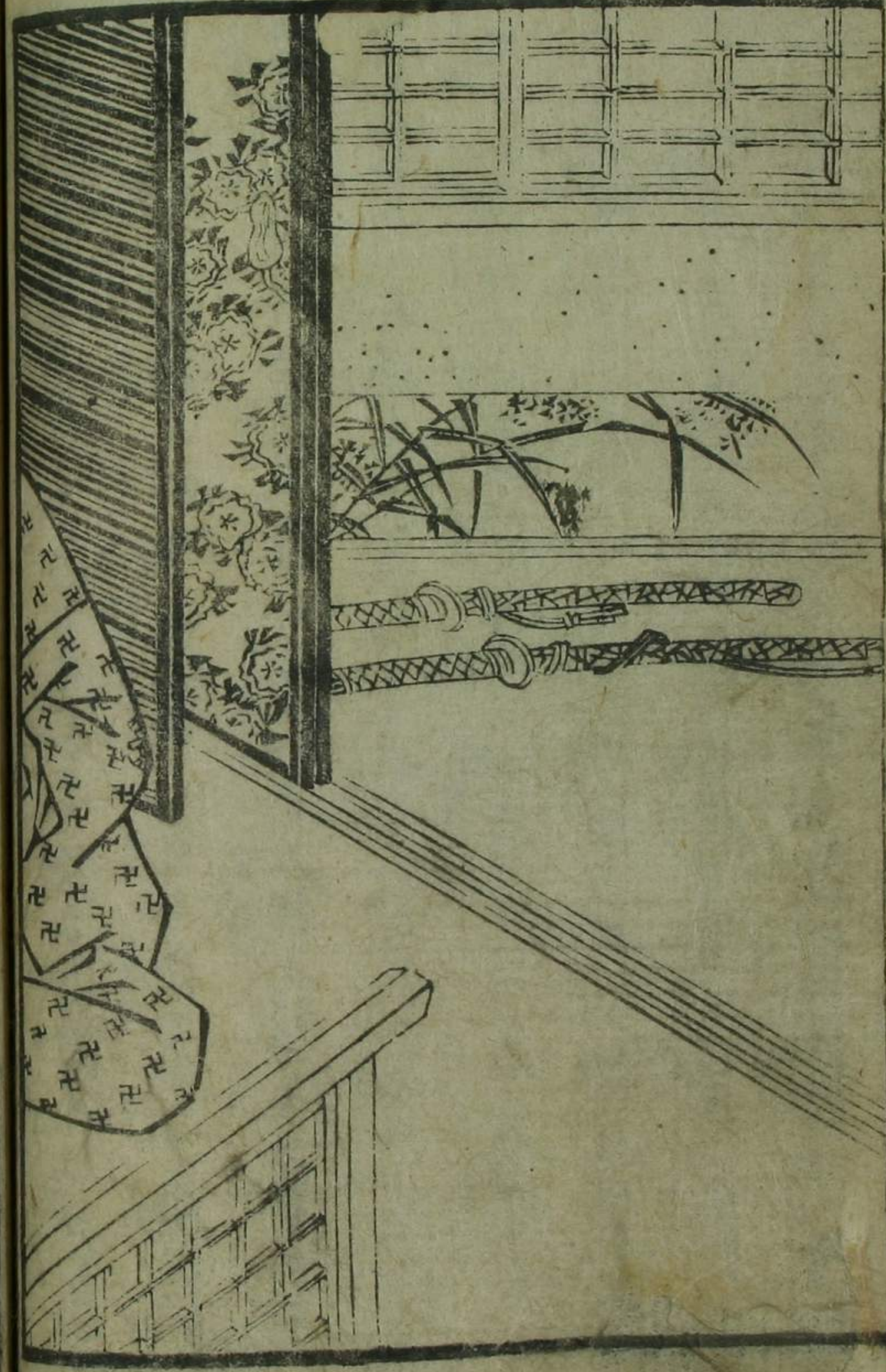


おろしきまひくもさう易く候もあつていふやうせう
あでさ入ひといふう。そまを教風の虫でも引か。あんとあ
病身あつてもさう。可きいふけ不使ふつけ苦勞の
やまするひまもさう。いれで事をつひいふ人更あ。今の病れも
あつてもこの。事もさう。ぐれぐれいさいう。せむとよ
苦勞を余計ふいて。壽命をちぢめさてもいづうとでも
長生いできません。思入へまこと小世の中不どうさひの
とざりません。そまあふらそあつてこの病れ。あうやま

しうとさうまんと
そふいばさうでもあろう。けさどもそまへんの一陽。えいひ
世の中。子家とさ入ひの。大切る金錢より。も子もどま
つこ家へい。誰しもまこと世の常。子をたす月か苦勞
の絶ぬ。かま入をかりてあつて。そんな世のあうひざ子
る貴でも下賤でも。子もいさういさうの常。マア入るかげも
ない格の上の。むろろ痛糸小世をある。食ふや食つての食
でさふと大切ふ可愛がり。病れ目とねむ小育てあげても。出世の

玉^{たま}子^こやうあるある^さ玉^{たま}子^こがんよう。由^{よし}厄^{やく}界^{かい}でもござりませうら。
金^{きん}がうぶをわねびひしませ。なアせんるゝこのんご金^{きん}
がうわううアモウ^やわうう。本^{ほん}とるくゝ玉^{たま}子^こがんよくかたびヨ。
あをうゝごまをうゝバト^{のうらうらうつらうの}
まてそめ名^な残^{ざん}のやせるゝ。は雲^{うん}も乳^う母^もとろろとも金^{きん}の介^け
のよとひき門^{かど}にまを別^{わか}とを惜^{おし}く送^{おく}るオより。送^{おく}るゝオ
この世^よう。うゝご冥^{めい}途^との旗^{はた}の空^{そら}へ流^{なが}るゝものと悟^{さと}るゝも。
さそるゝと世^よのたを。被^かるゝ身^みの衣^え布^ふ佛^{ぶつ}の。まの身^みの姉^{あね}み
身^みをさせてゝまるゝものあやと。ありありてハ目^め不^ふ識^し男^{おとこ}もを
まのぶ親^{おや}考^{かう}の。離^{はな}れ別^{わか}るゝひあゝ。乳^うも絶^えくおるゝ残^{ざん}の。空^{そら}
常^{じょう}の風^{ふう}ふはなま来て。身^みをつゝぬく入^い相^{あひ}ふ。おどろろさまでれ
とをるゝ。公^{こう}弱^{じやく}くてある。と。別^{わか}とてとそへ飼^かりける。さる
種^{しゅ}ふ金^{きん}五^ご帝^{てい}ハ今^{いま}知^しれ小^こと別^{わか}るゝ時^{とき}常^{じょう}ふかりて名^な残^{ざん}が
まを。あうむのつゝあり。ま。ま。人^{ひと}持^も身^みの候^{こう}るゝね。まを。あ
りて別^{わか}るゝと。その衆^{しゆ}ハ衆^{しゆ}張^{ちやう}の音^{おん}ふあうて。あうるゝまを。
さるゝ人^{ひと}公^{こう}るゝまもとわめくと。案^{あん}トまびても後^ご方^{ほう}るゝ。

破屋
米紙も
たふさ
所乃
こゑ



假名文章娘節用三編下之巻

江戸

三文舎自樂補述

第九回

朝夕ふ。あゝの落葉を雨と見つ。冬をば暮る寂しとふも
 空も雨月。彷彿人もある草の蔭へかきこひ来てまほは
 る。鶯もあゝぬ子雀の。ちよとちよと啼声をききつけても
 素色濡る紫雲ハ小三の山道を。吊りひきあ金の介を
 るぐさめてもまど妙子けの。泣てハ母を尋ねるあゝ不夜の

母ふちう。金のから紫雲や金
場て可也さふ。泪のわづひある。

まかりふふこのまう人だ。念仏とてあむむを。金うまねの子ふ
内へかへりてあそふふも。さきさきあすちといひる。うまねのたみどおてあす。金
きるる。さきさきあすちといひる。うまねのたみどおてあす。金
けちちひきまきまのせ。金

来てる人ま。い。仕るよ。かをちやんも。あまより。ト
つげ。さきさきあすちといひる。うまねのたみどおてあす。金

とるま。と。か。を。ま。ん。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。
や。が。て。あ。ま。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。

と。ま。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。
と。ま。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。

の。目。と。う。ま。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。
の。目。と。う。ま。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。

か。可。也。さ。ふ。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。
か。可。也。さ。ふ。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。

か。を。ち。や。ん。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。
か。を。ち。や。ん。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。

か。を。ち。や。ん。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。
か。を。ち。や。ん。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。

か。を。ち。や。ん。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。
か。を。ち。や。ん。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。

か。を。ち。や。ん。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。
か。を。ち。や。ん。と。は。せ。る。の。う。エ。で。梅。檀。い。ふ。と。あ。ま。と。や。う。



[illegible]

やまきりぐさ。うさぎくま柳橋へ尋ね訪て見せむおのひも
つね人の。極楽とありて傍にも。愛つるものぞ引越せし
うと。あそびの人み尋ねし。ふにどある人みあひまごころ
なる身あづも。男のめと義理づくで。身を捨らしてあつむを
貞女。近所の者までその面影入皆惜みつく泣きこと。あづ
あづの物語り。ゆて実物のよりがびりなり。あづは不従さ
やせあり。その捨てしもの形なき。受けば真分の師子の
いきて

夢^まと^ま。孫^まめ^めが^う歎^なゆ。イヤ孫^まで^まい^ひの^ひ夷^ひて^てあ^あつ^つ。う^うね^ねば^ばむ^む由^ゆ
 つ^つぬ^ぬゆ^ゆ多^た。か^かる^る毫^こと^とを^をせ^せて^てや^やう^うく^く来^きま^まう^う。こ^こふ^ふま^まど^どあ^ある^る
 身^みと^とあ^あつ^つて^てあ^ある^る。あ^あん^んの^のむ^むぐ^ぐ縁^{えん}切^きり^りせ^せう^う。あ^あま^ま中^{ちゆう}包^{ぱう}こ^こめ^めく^く
 き^きと^とあ^あつ^つ。今^{いま}と^とあ^あつ^つて^てハ^ハ却^{えつ}て^て恨^{うら}み^み。年^{とし}ふ^ふ不^ふ足^{そく}の^のい^いり^りが^が。長^{なが}
 今^{いま}せ^せび^びば^ばら^らの^のや^やう^うふ^ふ。あ^ある^るい^いの^の泪^{なみだ}ハ^ハ不^ふふ^ふあ^あめ^めの^の。あ^あん^んの^の因^{いん}果^{くわ}で^で
 生^い延^{えん}と^とう^う。あ^あり^りハ^ハ年^{とし}が^が恨^{うら}め^めい^いト^ト。老^{らう}の^のあ^ある^るを^をせ^せ。長^{なが}麻^まふ^ふあ^ある^るの^のも^も
 工^くと^とり^りあ^ある^る。紫^し雲^{うん}も^もあ^ある^るま^ま。夢^まと^とあ^ある^るち^ち。と^とも^もあ^ある^るま^ま。一^{いち}万^{まん}ふ^ふ
 味^{あじ}が^が萬^{まん}今^{いま}ハ^ハ約^{やく}束^{そく}る^るま^まと^とハ^ハや^やあ^ある^る。あ^あま^まを^をあ^あり^りて^ても^も目^めめ^めげ^げま^ま

一日は雨ふるこの息をもつぬ苦勞を仕死すころとてたま
 雨とのほど天も地も小三ひとり力みなり甲斐も多
 杖もふるまう今のやうに日暮るに念の念の少でま
 へうさめなれまはるまごマアおとふらんぜも多明ても
 書ても母をささひ泣もつけまわるみつら。まゐで居るま
 とうやうと。おひきうていふにやうみ泣て涙のやうなる
 るんふ一日もどろりません「イヤモウそりやいりやうまゐるも
 まい。おまゐの物を捨てると。もうが物もなりやうやうと笑

楯もさるるりちあるい。ママそまへ左もあま孫めが将へどふ
かるう。ちよろとさといきつててふささ。一たんふさやうい
びのまうこ子。金さういふあふか出う。乳母一寸連てか出ト
よびそらまて金の介ハ金。かをちやん坊をうちやんか出さなり
うをよりささ又けきさう。一葉をさ。一葉ハ一うり。よそのか祖又さんでハ
こま。是ハ坊ヤのか祖又さんでう。みをついてか辞後をかりよ
「やしくおとるいよふふ」ドろく祖又の御へ来やま。うよく
いふとささくぞ。そんなうかお産をやりまう。サア〜くみさ

おーやま。うまへくさう。出来さぞ。やしく丁もい。能ふいわ
ナアト。ようん下まゆやま。一かをちやんこ。か葉ふか祖へやん
か其ど。きねう。びやイまも。一「マヤま。か葉子をかいつさき
この。よくきまふかれとや〜さぞ。よいか祖又さんをおて坊ハ仕
合せの。さ。一「〜。イヤの坊ヤをさるふつけ。ちどめてさつこ
うでさ入可愛うつてあ〜ぬの。いら〜族源く笑えを〜も
金立希めう。さ。ぬもる。理うエま〜て小こどのハ女のみ。あマア
いひけるふを。さて胞もあうともせぬ中ぐ男の〜あ〜と

月と捨らしてハ貞女ともありなごとも。賞ても是が採つ
さふら。あうーまのてあまんが。身ふえてハの爺を鬼とも
蛇とも悪魔とも。さぞアあといと名つゝわろろ。そのひひ状でも
みけごとも。その子を内へいれてきて金五郎が時と披露に
小三どのに改め。ねんごろふともうりせまふ。せめてもそを
あふまひあきうめてさうさうト
さきとあども あふま せんくまのりあ。何とておねくやまをう。
えんみと世の因縁あるうもあうこもごうまをせん。そとふ

つけても姉妹が。月の人のあうまうと。おんるーヤとあふ
あひづ。さうごともが生まる。あうくでござりまふト
小三が身ははる。あふまのあふまを育せ。そのあふて里みり。
早く又ふも死ころま。親ふらまをさうで。さ川み沈る。
小三の金五郎と共ふ育ち。さういふ事を契りし。金五郎を
あけ。さういふ。さういふ。さういふ。さういふ。さういふ。
鴨川へ身を沈め。さういふ。さういふ。さういふ。さういふ。さういふ。
つひ小三の親街へあうま。其妓とさういふ。さういふ。さういふ。さういふ。さういふ。

宗長

ねまふらぐそま候いへしきりひ不やう候く只今暫し
 あらうとあらうの世のまはれよつ衆を衆にりくまはれ
 うまのふらうと衆のひきもなかりうまびと
 まふらぐそま候いへしきりひ不やう候く只今暫し
 あらうとあらうの世のまはれよつ衆を衆にりくまはれ
 うまのふらうと衆のひきもなかりうまびと

[illegible]



お連れ入りば金をおりと「おき雪きどうぞ」このう間まぐんご頼たのつききどうぞ
おき大おきき形かたちをして又またおきさんあつつままこの「かいいととんんみ
ままででららびびいいまませんぐトわといひいわわれれがアノきん金きんがうへいいいう
ままううとといい「きんたたががアと先さきへへ参まゐりしトきののせせきき人ひとアヤレレく
ととびびままととどどろろんんおお雪ゆき々々のの寺てらああつつをしてままま向むかふふ向むかへ
おおららううははああ雪ゆき々々ののおお傳でん言ごんがあつつととどどろろおおめめ人ひとおお金きんがうを連づづ
ちちううとと洩はりりおおげげおおああいいととヨヨいい人ひとととおお雪ゆきいいううむむいいててハハイイとといいううととハハテ
どうもおおままへへおおめめ人ひとののややううををぐぐととううわわ人ひとが何ととんんみみおおままぐぐ

ののどどろろうう。アアききととええととううわわアア何なんぞの。おおままぐぐおおままのの香かききり
おおららうう。そそととでで獲とかかささううととののまま「かいいととんんみみととままああ
そそんんみみがが「きんおおめめ人ひとわわアアどどうういいふふ話わだだ。おおままああつつとと
言いてまううせせなな。一いっ生せい活かつふふととおおめめ人ひととと隔へてまああととととまま吏し婦ふとといいふ
めめのの「かいいととんんみみとといいふふのの後ごううととううアア教しやうへへままううととうう
「きんおおんんののままととううちちへへそそんんみみええををわわねね人ひとのの「かいいののままとと
ととももおおめめ人ひとおおままののままととううをを「きんままととててとといいふふととうう
ハハいい。そそととおおめめ人ひとととそそののおおままとといいふふ。先せんううつつととううアア形かたちとといいふふととうう。

然とておぼせざるまうらう。あまこゝもは苦勞をわけしまはるゝ
 のふ^金「まんごた。又おひひ^さあうふ。モウいらうらうてもえど
 まうわへ。まんも大堅ふやめてえぬ^{おげ}」あうこひやうど
 ござのまんご。竹^{えん}みつけ被^うみつけて常^{つね}こまきとともる。えん
 みつこくがあらうゆゑと。この男^こを恨^{うら}んでありまはる。そふ
 とう^{えん}「まんごのうもより」^金「け目^めごけ^きもあらう」又^{おき}まんご
 たらうら。か^うか^えひが睡^すませぬらう。かしまはるう。お被^かをかきあそ
 ぶ。まをみよ。アノあるこのかるすのうち。お^と煙草^{えんそう}盒^{はこ}の引^ひき

張氏疎遠甘樂也。而孝性

養子も子を欲ひ

月出入圖

の故をなすの所免さるる

遊ふ處へ下り。親族券屬小對面とて。意中み小三の才の

夢て悲歎の涙ふらふ頻ふ無常と歎むるものなり。後小僧と判

仏門に入りて身を雲水とせしむるは諸王御出とるん

假名文章娘節用三編下之卷大尾

